

野路の歴史 遺跡発掘で

野路の古代から中世が見えてくる

中世の野路、萩^{はぎ}の玉川^{たまがわけんしょう}検証

中世の歴史文献^{れきしぶんけん}に出てくる野路

中世の野路宿^{のじじゆく}、岡田遺跡発掘

古代官道^{こだいかんどう}、東山道^{とうさんどう}と野路驛^{のじえき}

古代の野路小野山製鉄遺跡^{のじおのやませいてつせいせき}

木瓜原遺跡^{ぼけはらいせき}古代製陶製鉄^{こだいせいとうせいてつ}コンピナー^{コンピナー}ート

野路の社寺^{のじしゃじ}と集落^{しゅうらく}の移り変わり^{うつりか}

中世の野路宿と東山道

発掘調査から見た想像復元絵図



目 次	ページ
1—1 中世の歌人達が残した野路の玉川	1～ 3
1—2 中世の歴史文献に出てくる野路	4～ 5
1—3 郷土野路の遺跡発掘の意義	5
1—4 古代、中世の官道と宿駅とは	5～ 6
2—1 野路岡田遺跡発掘の成果	6～ 7
2—2 野路岡田遺跡に古代の遺構発掘	7～ 8
2—3 野路岡田遺跡で中世の野路宿発掘	8～ 9
2—4 野路岡田遺跡で古墳発掘	9～11
3—1 野路岡田遺跡から「東山道」発掘	11～13
3—2 中世の野路宿と東山道遺構発掘	13～14
3—3 江戸時代の東海道と中山道(東山道)	15
3—4 野路宿を治めていた環濠屋敷と領主館	16～17
3—5 環濠屋敷の立派な井戸	17
3—6 埋蔵物の発掘状況と遺跡出土品	18
4—1 史跡野路小野山製鉄遺跡再調査	19～20
5—1 野路木瓜原製陶、製鉄遺跡発掘	21～22
6— 集落の移り変わりと社寺の歴史	23
6—1 新宮神社の由緒	23
6—2 八幡神社跡記述より	23
6—3 野路寺伝承と常德寺	24～25
6—4 玉泉山 浄泉寺	25
6—5 白萩山 願林寺	25
6—6 本清山 教善寺	26
6—7 南田山 高岸寺	26
6—8 川の下 猿田彦神社	26
6—9 南田山 稻荷神社	26

参 考 文 献

- 1、草津市教育委員会文化財保護課
 - ・ 野路岡田遺跡発掘現地説明資料
昭和 55 年第一次より平成 14 年まで
 - ・ 野路小野山製鉄遺跡発掘現地説明会資料
新聞各紙、遺跡発掘ニュース
 - ・ 草津市歴史発見地図
 - ・ 草津宿街道交流館—平成 12 年度
街道と遺跡 古代の道と驛
- 2、栗太郡志・野路のくらしと歩み・草津市史
- 3、週刊朝日・日本の歴史 中世Ⅰ—Ⅱ
- 4、京阪歴史フォーラム
「近江京と古代の国土軸」京大教授、金田章裕
- 5、大明堂古代近江国の東山道、滋賀大高橋美久二
- 6、文藝春秋古代日本史最前線
律令国家の成立と道—全国を貫いた古代の官道
- 7、河出書房新社 図説 滋賀県の歴史
- 8、広重、北斎旅こころ浮世絵展 図録
- 9、中世の宿絵図—草津市 竹川輝夫
- 10、野路の玉川、歌集、草津市文化協会
- 11、東山道と東海道の年代とルート分析、
矢橋町 辻浦 岩水
- 12、名刹の旅 玉川山 常德寺
- 13、立命館大学木瓜原遺跡パンフレット
- 14、日本人の住いと生活の歴史—稲葉和也
- 15、栗東市教育委員会文化財保護課資料

1—1 中世の歌人達が残した

野路の玉川と野路の篠原

奈良、平安、鎌倉、室町の前期(702年から1350年)頃まで、野路には古代の官道、道幅12mの東山道がJR琵琶湖線より西330m下に通っていた事が最近の岡田遺跡発掘調査で明らかになった。

現在の野路旧街道(室町中期、江戸時代の東海道)になる前は、この東山道を京の都から、大宮人達が烏帽子姿で馬に乗り、付人を従えて勢田の長橋を渡り、景勝地である「野路の玉川」日本名勝六玉川の一つ、に度々訪れた事が詠歌の中からも読み取れる。

「野路の玉川」の地は勢田丘陵に続く野路奥山(牟礼山)を頂点に、そのなだらかな小野山丘陵の裾野にあり、当時は「十禅寺川」の堤防もなく田畑も殆どなく、上流には松林や雑木林が全体を覆い、その尾根伝いに湧き水の源流(現在の野路東松下冷機、玉川中学の下)があり玉水が湧き、その清流が下流では幾筋かの小川になって、一面に生茂る萩やススキの原野を当時、堤防のない十禅寺川が自然の地形にまかせて流れていたものと察しられる。



また、十禅寺川周辺にある野路の小字名・(玉水)玉の様な綺麗な水が流れていた。(広野)篠原とススキが広がる広大な原野「篠原」で在った。(惣水)小川が集まって来た場所。(澤)澤地が広がっていた。(萩の里)萩の玉川の近くに集落があり。

等の地名からも都人や歌人にとっては自然の美しい格好の景勝地であった様に思われる。

平安、鎌倉時代の都人や詠み人は十禅寺川を

600m程琵琶湖寄りに下った、字榊差から字岡田に向かう街道で、当時の東山道沿いに位置していた「萩の玉川」と考えた方が理論的である。

いくつも詠まれた詩の年代と街道の年代の比較や野路宿や野路集落が野路岡田遺跡を中心に東山道沿いと古道馬道沿いにあった事実から判断すべきと思われる。

野路の玉川は平安、鎌倉時代の東山道沿いに位置し往来の旅人たちも、秋には「詩に詠まれている、野路の篠原」現在の広野あたりを越えると、一面に波いる萩の花の景観を堪能したと推察される。

これ等の歴史的事実は、千載和歌集52首(選者藤原俊成1187年完成)や夫木集、拾玉集、十六夜日記、関東紀行を始めその他の歌集と名所絵図によって、平安から江戸時代までの変遷が次に紹介する詩に出ている。

●平安、鎌倉の京の都、天皇、公家支配の雅やかな時代、野路の玉川と野路宿が盛況であった頃(鎌倉末期)以前の詩に詠まれた野路の玉川の風景。

1. 明日もこむ 野路の玉川萩こえて

色なる波に月宿りけり 源 俊賴



2. 鶉鳴く 野路の玉川 けふ来れば

萩こえ波に 秋かぜぞ吹く 藤原家隆

3. 萩か枝の 末はさされに流れありて

波も花なる 野路の玉川 秋成

4. 秋萩の花にうもれし玉川は

霞の結える名こそありけれ 清之進

5. 夕日影さすかに 旅のいそかれて

朝もとめ 野路の玉川 安定

6. さを鹿の志らしむ 萩に秋見へて

月も色ある 野路の玉川 仲光

7. 月さゆる 氷のうへに霰ふり

心くだくる 玉川の里 俊成

8、白波の 音ばかりして見えぬかな

霧たちわたる 玉川の里 顕季

9、近江路や 野路の篠原夕行けば

志賀よりかえる笹波の風 慈鎮

10、東路の 野路の朝露けうやさは

たもとにかかる はじめ成らむ (関東紀行)

11、軒時雨 古里思う袖ぬれて 行くさき遠き

野路の篠原 安嘉門院四条

12、近江のや野路の旅人いそがなん

野洲の原とて遠からぬかは 西行

鎌倉時代には鎌倉に天皇家より将軍を派遣し鎌倉は執権による武家社会の支配で京都貴族や公家の雅な時代も過ぎ、鎌倉幕府と公家、貴族政権の勢力争いで東山道の野路の玉川も、野路宿も衰退の一途を辿ったものと考えられる。

それらを現す詩が次の様に幾つか詠まれている。

1、寂ふる 野路の篠原ふしわびてさらん

都の夢に なにもみず 成子内親王

2、露わくる 野路の篠原しのぼるる

その古へはるか からざしき 宗 硯

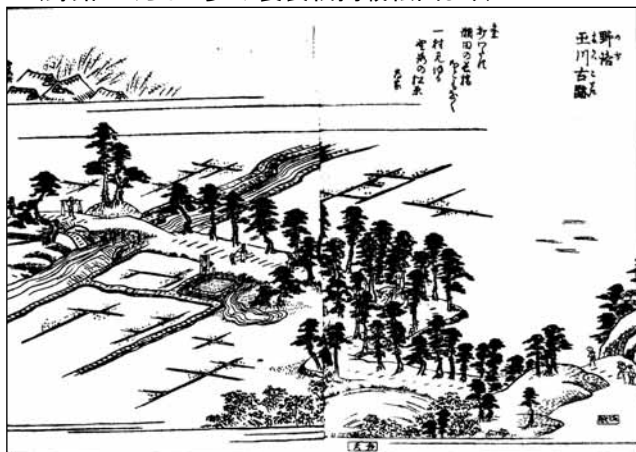
3、ゆく人のとまらぬ里と成しより

哀れのみまさる野路の篠原 (関東紀行)

4、打ちわたる 勢田の長橋ほどもなく

ひと村見ゆる野路の松原 (夫木集)

(野路のくらしと歩み裏表紙掲載絵図より)



「旧東海道の松並木、瀬田方面から弁天池を越えると玉川の古跡と十禅寺川が描かれている」

この絵は平安、鎌倉、室町時代が過ぎ江戸時代に玉川が改修工事で堤防が築かれ十禅寺川として流れているし、野路の玉川古跡として明治以降に描かれた絵図と思われる。



「旧東海道の松並木 明治～大正、昭和初野路付近、昭和9年の室戸台風で並木の殆どが倒された。写真、栗田群史より」

「古跡、野路の玉川」、に因んで現代に造られた、その他、絵図や詩のレプリカや歌碑

野路の玉川は、現在の「古跡、野路の玉川」室町から江戸時代に開通した事になっている旧東海道沿いに石碑と萩の玉川のレプリカが昭和51年に施工され保存されているが、この場所は年代から見ても東海道はのちの時代に通ったところで余りにも不自然と思わねばなるまい。

◇閑茶に いにしえ徳ぶ よすがなし

野路の玉川 萩はいずこか

この詩は萩の玉川の史跡と、開発によって野路の急速に失われて行く自然を惜しんで詠まれたものです。

草津市 垂水 栄



「昭和に史跡として保存のため設置された、野路の玉川」

中世までの野路の玉川とは、絵師や歌人の情景から判断すると自然のままの幾筋かの小川と広い池があり周囲一面に萩が咲き乱れていたと考える。



「江戸時代に玉川に堤防を築き下流域の干害用水として利用、現代の十禅寺川として流れている、この土手を利用して(古跡、萩の玉川)に因んで昭和50年代に、当時の老人クラブ会長中野惣三郎氏が植樹し管理し写真の様に立派に育ててこられた。

平安、鎌倉時代の絵図とは場所も赴きも違うが、秋には波いる萩の花の風景を見る事が出来る。」



「昭和52年玉川小学校開校記念に寄贈され、講堂の舞台に掲げられた^{どんちよう}緞帳、画かれているのは(萩の玉川)の絵図」



「平成3年3月玉川公民館設立記念として歌碑が公民館の駐車場、中庭に設置されている」

玉川や萩越す波に 月は星 春郊

秋の夜長、月の光が^{きらきら}と降り注ぐ野路の玉川に、兩岸から川面に一様に萩の花が枝を垂らしている。その萩の花を波が越えていく、川面は月光が映えてまるでたくさんの星をまいたようにきらきら輝いている。

「この説明パネルに作者不詳となっている」



「野路東一丁目、南草津駅北側の、かがやき通り角地、に(野路玉川古跡)広重の絵図を陶板に焼き付けたものが、野路東部土地画整理事業完成記念の一環として平成13年に設置されたものである。」

「かがやき通り、野路の玉川古跡説明書きによると」

この野路は中世の記録にその名が多く登場するように、当時の宿駅として重要な位置にありましたが、近世以降はその地位を草津宿に譲ります。

この集落の南はずれの旧東海道沿いに、諸国六玉川の一つ「野路の玉川古跡」があり、六玉川とは古来、歌枕として詠まれた六ヶ所の玉川で、浮世絵ではしばしば当世風俗の見立て役として描かれています。井手の玉川、野路の玉川、野田の玉川、高野の玉川、調布の玉川、搞衣の玉川の六つをいい、平安・室町時代の和歌にしばしば登場し、人々の耳目を集めた名所です。

1-2中世の歴史文献に出てくる野路

- ・1180 年- 平 維 盛は平家の大軍(5 万)を率いて伊豆で挙兵した 源 頼朝(関東軍)攻めの途中野路に泊まるとある。 「源平盛衰記」

- ・1183 年- 平家の大軍(10 万)が木曾義仲追討のため、都から北陸道と東山道に別れて勢多橋を渡り野路宿を通して北陸路へ向かった。

「源平盛衰記」



- ・1185 年- 源 の義経、篠原宿にて平 維 盛を斬り、次に野路口においてその子 平 清宗を斬るとある。 「吾妻鏡」
- ・1190 年- 源 頼 朝 が奥州討伐して美濃路を経て、東山道を上洛の途中、野路宿にご逗留せしめたまい、5 月 6 日豪雨のため一日上洛を引き伸ばし 5 月 7 日午後ご入洛とある。 「吾妻鏡」



源頼朝像 神護寺蔵

(源頼朝像 神護寺蔵)

- ・1221 年- 承 久 の乱、承 久 3 年 6 月 12 日、北条 時房(相州)・北条泰時(武州)と鎌倉軍

が野路の辺で休息す。13 日時房以下鎌倉軍、野路より方々の道に相分かる。時房勢多橋で官軍と戦いを挑み云々とある。 「吾妻鏡」



「承久の乱鎌倉軍の京都攻めルート」

- ・1238 年-嘉禎 4 年 2 月 16 日今日將軍家九条頼經、野路驛にご逗留、明日ご入洛の云々とあり、翌 17 日野路宿を御出る。 「吾妻鏡」
- ・1246 年- 寛元 4 年 7 月 27 日將軍、野路で昼の御宿なり、この所において日暮れ、夜半に及びてたたる。



(貴族の乗る御所車)

- ・1252 年- 宗尊親王、鎌倉に下向の途中、野路驛に御泊まるとある。
- ・1280 年-公安 3 年 1 1 月京より東山道を旅行せし

紀行文あり、著者の名を逸す、題して
春能深山路という、13 日京を出て瀬田を
渡り野路驛に午餐を為し蒲生郡鏡驛に宿
したるを記す、此紀行中注意すべきは当時
勢田橋が腐朽して危険状態にありしこと、
野路驛にて椎の木柴を折敷たる上にて午
餐を為したるをいうもの、とある。

「栗田郡志 第四篇鎌倉時代」第 20 章 288P
・1299 年- 草津という地名がはじめて登場とある。



「一遍上人絵傳」

- ・ 1422 年- (室町) 足利義持が草津御所を造営する。
- ・ 1603 年- (江戸) 徳川幕府によって草津宿場がひらかれる。



「東海道五十三次、江戸時代の草津」 広重

1-3 郷土野路の遺跡発掘の意義

遺跡発掘は野路の歴史検証と歴史事実の発見である事が、開発の進んできた昭和中期以降40年代位から、野路の幾つかの発掘によって新しい重要な事実が発見され証明された。

特に東山道と東海道の野路の分枝点の関係や時代別ルートや野路宿と野路駅(岡田駅)、野路の玉川設定場所、野路の集落の移動時期とその変遷、等々

については歴史書―栗太郡志、草津市史、野路町史等、で内容に問題のする部分について検討し修正すべき箇所が幾つかあると思われる。

野路の古代から中世の歴史が塗り変えられる、近年の発掘として以下の内容が出て来ました。

◇重要な遺跡と歴史事実の発見

①野路木瓜原遺跡―立命館大学誘致による野路山の開発で奈良時代の多数の窯跡発見、製陶、土器、製鐵、製銅器、梵鐘 複数の製鐵、製陶の古代の一大コンビナートであった。

②小野山製鐵遺跡―京滋バイパス開発工事で野路山丘陵地に古代(奈良時代製鉄炉)11基出土、製鐵専門遺跡としては全国で始めて国指定遺跡として保存されている。

③野路岡田遺跡― 南草津駅西側、野路西部土地区画整理事業で川の下までの 30 ヘクタールを開発するに当たり農地を平成 12 年から 4 年掛かりで調査発掘中

イ、古代から中世の大道(幅 12m~16m)の道状遺構が発掘された。これは古代の官道(東山道)、一時期東海道と併用された時代のものが発見

ロ、古代から中世の野路宿跡発掘、大型掘立柱建物、掘立柱町並、民家、農家の集落跡、納屋、共同井戸、竪穴式建物、その他生活遺物と土器多数発掘

ハ、古墳時代5世紀の方墳、堀周溝を含む(30m)の古墳の破壊跡と円筒埴輪破片等周溝から発掘

ニ、環濠屋敷と領主館、大型建物跡、野路宿を治めていた領主か政庁の役人屋敷―野路新宮神社お社建立の藤原為亮か?

1-4 古代、中世の官道と宿駅とは、(参考歴史資料)、より

官道と宿駅とは(701 年)大宝律令が發布され五畿七道を制定した。その三世紀後(927 年)延喜式律令改正によって宿駅と傳馬の充実が謀られた。古代国家体制確立に全国に国府を配置すると共に緊急伝達システムとして日本全国に七道を通し、宿駅を一定の間隔30 里(16km)を設けて驛馬、傳馬 10~20 頭を置くことが規定された。これにより、都からの軍隊による制圧、租税、物資の運搬、官吏の移動や伝達を短縮すると共に容易にした。

中世野路驛

中世畿内、七道の宿駅は402ヶ所となり、東海道56駅・東山道82駅があり宿駅には(駅家郷)の役務に働く人達の里があり傳馬10疋～20疋を常時おき、この維持管理と、これに付随して必要な駅田の耕作もしていた、また、駅舎の接待や荷物の運搬などに携わる人も居た。これ等の人々を合わせると驛戸30～50が驛子として従事していたとある。

この当時の宿駅の一つとして歴史的に記録に残る中世の野路駅が野路岡田遺跡から発掘された事実は野路町にとって大変、大きな意義を持つ、我々野路町の住民の祖先の何割かはここに住みこれ等の仕事に従事していたものと考えられる。

- ① 五畿とは一都に近い大和(奈良)、山城(京都)、河内、和泉、摂津(大阪)の五国とした、
- ② 七道とは一その他の諸国に国府を置き七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)を通し都と直結する道とした。
- ③ 東山道とは一奈良時代、初め日本の山岳地帯を結ぶ官道として、近江(滋賀)、美濃、飛驒(岐阜)、信濃(長野)、上野(群馬)、下野(栃木)、武蔵(埼玉、東京)、奥羽(福島、宮城、東北各県)、の各国の国府を結んだ官道と呼ぶ。

2-1 野路岡田遺跡発掘の成果

野路岡田遺跡と周辺の遺跡(草津市文化財保護課)資料より



◇昭和55年に現在の特老施設(やわらぎ苑)建設に伴い草津市教育委員会文化財保護課で第一次発掘調査が行われた。

続いて、二回目と三回目にわたる試掘調査があり、結果、平安時代から鎌倉時代の野路宿跡の一部では、と思われる多数の遺物と建物跡が発掘され断定すべきものは、今後の発掘調査に期待することとなった。

◇その後、四回目が平成8年にマンション敷地の一部553㎡を対象に発掘調査が行われた。

成果は、縄文時代の貯蔵穴跡2基をはじめ、古代末から中世にかけての掘立柱建物跡および土器埋納ピット、遺物に縄文中期から末期の土器や石族や石錘等が出土している。また、平安時代の住居跡2棟も発掘された。



(岡田遺跡、鎌倉時代馬道) 草津 竹川輝夫 絵

平成12年より平成13年 発掘調査平面図により鎌倉時代の野路岡田集落と馬道沿いの街並み想像復元図

草津市教育委員会文化財保護課資料より



(年度別岡田遺跡発掘調査区域) 図-1

今回ようやく第二次発掘調査の機会が訪れた。
草津市南部副都心計画に基づく、野路西部区画整理組合の区画整理事業（30 ㍍）南草津駅西側～川の下までの田園地帯全体の開発が開始され、それに先立ち、◇平成 12 年度 5 月より、第二次発掘調査が四年計画で実施されている。



（川の下側より南草津駅を望む発掘現場）

岡田遺跡の地形は瀬田丘陵に続く野路無礼山を最高峰に野路山—小野山—狸山等を経て野路本郷を越えて、丘陵地の先端は字岡田に達している。

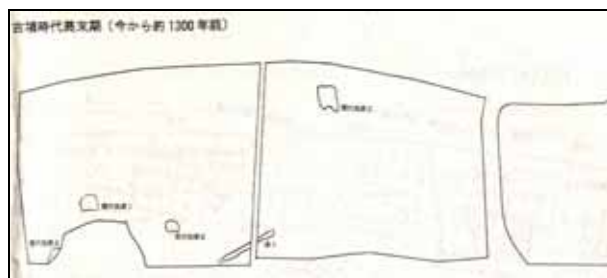
H12 年度は JR 南草津駅から古道「馬道」沿いに図-1 の A 区の駅下の高台から重機で表面の田圃の土を削り取ると、野路山と同じ赤土の土質が全面に現われ、その表面に土の模様が出て来る。その模様によって掘り出して行くと、中世の生活の痕跡面（遺構）掘建柱建物跡や井戸、溝、等が無数に現われてきた。

当該 12 年度 A 調査区域から時代区分を大きく分けて次の三つの遺跡発掘があり年代別調査が実施された。

2-2 野路岡田遺跡古代の遺構発掘

① 7 世紀代（古墳時代末期、飛鳥・白鳳時代）

竪穴式住居 4 基の他、遺構や柱跡、土器、等出土
—小規模な集落が形成していた。



（古墳時代 1400 年前—草津市文化財保護課発掘調査平面図 1）より



（竪穴式住居その他古墳時代の遺構）



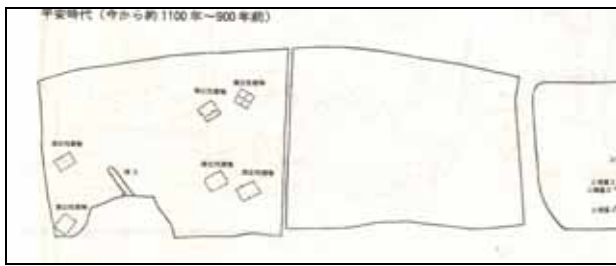
（古代の生活があった井戸跡）



（弥生から古墳時代の竪穴式建物集落）

② 9 世紀～11 世紀（平安時代前期～後期）

掘立柱建物と土器、他多数の生活遺構、民家、建物が 6 棟以上これからの調査区に広がって行くものと予想できる。



(平安初期 900～1100 年前—草津文化財保護課発掘調査平面図 2)



2-3【野路岡田遺跡に中世の野路宿発掘】

③12 世紀～13 世紀(鎌倉時代)

平安末期から鎌倉時代は(平面図 3)の様^{こどうまなち}に古道馬道沿^{ほったてはしらたても}いに掘立柱建物^{とういじょうなら}が大小 40 棟以上並び町並み^{まちな}を成している。

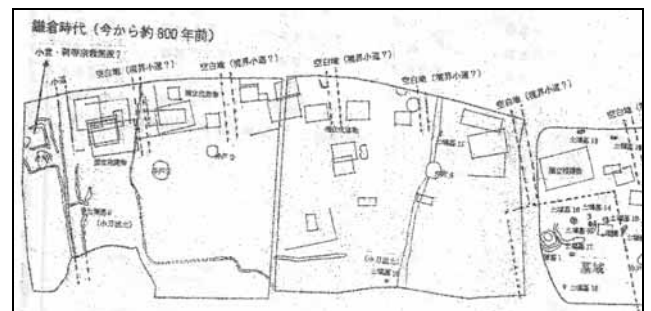
また、以前古道^{いぜんこどう}の北側の発掘調査でも馬道に沿って建物^{いぶつ}が並んでおり、出土した遺物、土器の種類^{しゅるい}が青磁^{せいじ}や白磁^{はくじ}、舶来^{はくらい}の食器^{しょくき}、壺^{つぼ}など農村集落跡^{のうそんしゅうらくあと}では出ない物が多く含まれていた。年代も文献^{ぶんげん}に残る野路宿^{しゆく がっち}と合致する。

小笠原^{おがさわら}・滋賀^{しが}大教授^{だいきょうじゆ}(考古学^{こうこがく})はこの遺跡^{いせき}が文献^{ぶんげん}に出てくる「野路宿」だった可能性が高まったことに加え、全国的にもまだ明らかにされていない中世の宿の構造^{こうぞう}を探る上でも貴重^{きちよう}な資料遺跡^{しりよういせき}。

(中世街道と宿場町)



(平成 12 年 9 月 23 日、テレビ、新聞は中世の野路宿の発掘ニュースを報じた。)



(鎌倉時代 800～1180 年前—草津市文化財保護課発掘調査平面図 3)



(馬道に沿って無数の掘立柱建物跡と他の遺構)



(馬道沿いに掘立柱建物跡が 38 棟並ぶ)



(中世野路宿の町屋、御休み処、模型) 岡田 俊二作



「ミニ模型、野路宿 常夜灯」 岡田 俊二作
 (中世、東山道と野路宿の交差点には道しるべとしての常夜灯が在ったのではと思う)
 今の発掘現場、東山道の野路宿と昔の東海道岡田が原を詠んだ和歌に次の詩がある。

○東路の野路の草ばの露しげみ
 行くもとまるも袖ぞしをるゝ。 摂 津
 ○ 東路にはるや来ぬらむ近江なる
 岡田が原に若菜摘むなり 恵 慶



(草津市文化財保護課現地説明会資料馬道イラスト)

この他に無数の柱跡と六ヶ所の共同井戸、区画溝と土坑墓25基、土器と短刀が埋設されているものも3箇所確認された。

2-4【野路岡田遺跡に古墳発掘】

◇ 平成 13 年前半の調査区中央の西より古墳一基が発見された。

古墳は濠を含めて南北 21m、東西 20mの方墳で、濠は幅 3.5m、深さ約 1mあり、盛土の部分は後の時代に農地として削り取られているため、盛土の高さと墓穴の内部、石室や石棺等の状況は不明である。



「古墳の周濠を掘下げると多数の土器片が出た」

但し、古墳の濠から大量の円筒埴輪と朝顔形埴輪の潰された破片が発掘された。

(栗東市出土文化財センター資料より)



(古墳の種類及び円筒埴輪と朝顔形埴輪)

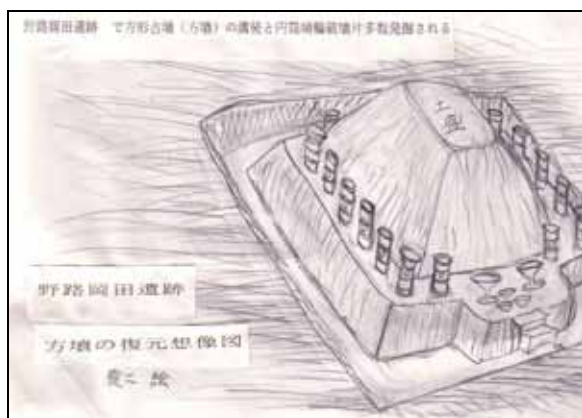
これ等の埴輪や濠から出た須恵器などから 5 世紀後半(今から 1500 年位前)と推定できる。

また、濠の近くに時代の古い別の埴輪が一体分崩されて遺構に貼り付けてあったことから、近くにもう一つ別の古墳が存在していたと考えられる。



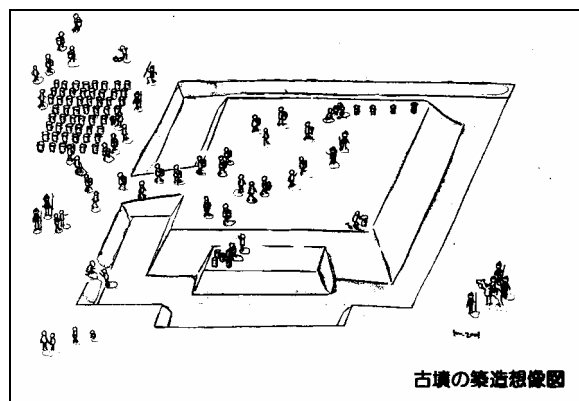
(別の場所から移した種類の違う埴輪)

(野路岡田遺跡で発掘された 20m の方墳)



(野路 岡田遺跡の古墳イメージ図 岡田俊二絵)

死者の霊を守るため古墳の周りに埴輪を配置して祀ったと考えられている。



(草津市文化財保護課現地説明会資料より)

今回の発掘調査までは野路岡田地区には古墳の存在は認められていなかった。

この調査によって、野路岡田地区には古墳時代の集落があり、古墳が幾つか存在していたことが新たにわかり野路の歴史に加えられる事と成る。

近くに現存する野路の古墳には、次の三つが保存されている。

①野路柳差古墳



新十禅寺川南側で田圃の中、古墳の小さな森が残されている。この地は中世までは古代の官道「東山道」が「野路字柳差」を通り、瀬田に向かって貫通していた道端に位置し、柳差古墳群、南田山古墳群、から南笠古墳群と続き、百基を越える古墳があったと伝えられている。これ等の古墳は江戸時代、膳所藩の農地開墾政策でその殆どが潰されて、現存している古墳は野路に 3 つ南笠に 2 つしかない。

② 南田山稲荷古墳

野路字南田山の稲荷神社内に古墳の横穴式石室の入り口が現われている。



野路榊差古墳群の一つで幸いに江戸時代宝暦3年の稲荷神社建立で造営地にあった古墳で農地開拓の地域から逃れたと考えられる。

③野路 下北池狐山古墳



野路町下北池—北川の北で JR琵琶湖線路の西に通称「狐山古墳」が今でも残されている。むかしから狐が住み着き、いつしか狐山古墳と呼ばれている、最近では下北池団地やマンションが直ぐ傍にあり、狐も住みにくくなって姿を見せなくなった。

みなみかさこふん 南笠古墳

(南笠古墳群の現存する一部古墳が二つ並ぶ)

野路の榊差古墳から 500m びわこ寄りの新十禅寺川沿いに古墳の森が二つならんで見える。

南笠治田神社社記によると、この地方の開拓者治田連彦人が祖神として 開化天皇とその皇子ヒコイマスのミコトを奉ったことに始まると伝えられる。尚、神社領有地に治田氏に関する二基の古墳がありと伝承されている。

この時代は野路の北川水系と十禅寺川を挟む 狼川水系を支配する豪族の一族が、次々と古墳を造ってこの地域に古墳群が残ったものと想像できる。しかし文化年代(1815)に 22 基あった古が今は二基しかない。



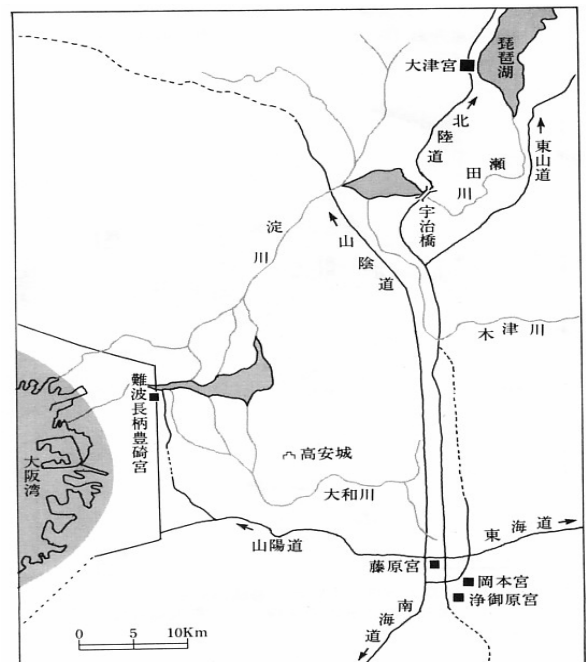
3-1 野路岡田遺跡から【東山道】発掘

◆古代の官道近江の道「野路を通る」

(東山道と東海道は混合ルートであった。)

古代から中世の近江国には東山道、東海道、北陸道の官道が設けられ、この内、野路を通っていたのは東山道と東海道があるが、飛鳥、奈良時代まで東山道一本だけであった。東海道は壬申の乱の進行ルート(607年)頃、東山道の野洲から(—三雲—伊賀—柘植—伊賀)と(土山—鈴鹿)の二つから攻めて来たとある。

「東海道」—飛鳥、藤原京(690年)頃の古代の東海道は大和の都から(大和—伊賀—伊勢)を経て尾張、三河え抜けていたとされている。



4. 7世紀後半の宮都の位置(大津宮からの主要道を除く)

大宝律令（701年）大和の都から（木津—宇治—原—勢多）へ出て勢多の近江国府から野路宿までの東海道は東山道との混合ルートであり、長岡京遷都（784年）頃（都—山科—大津—勢多橋—国府）が加わり、東山道と併用していた。

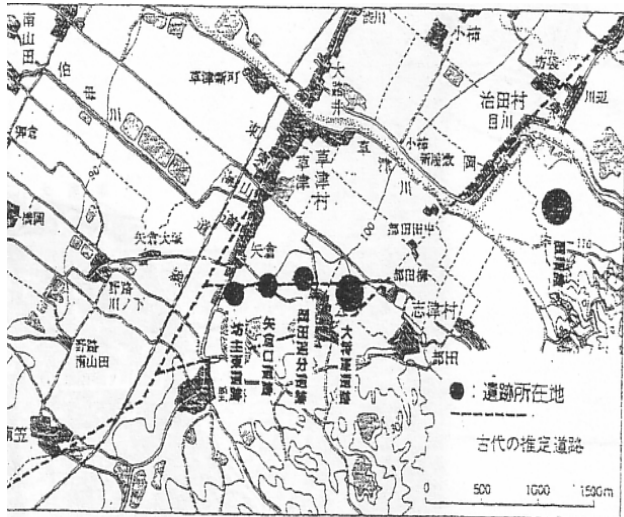
しかも東山道沿いに存在していた野路宿がどの地図にも古代から中世の東へ向かう東海道への分枝点になっている。

分枝点は古道馬道と東山道、の交差する野路宿から東へ（野路岡田遺跡—野路新宮神社—志津追分—大將軍遺跡—栗田郡衙、岡遺跡—石部）—三雲へのルートが考えられる。

地元伝承と野路や志津のお年寄りでは昔から明治末期まで（野路岡田、馬道～志津追分—三雲）間の古道を略して（おかさん道）と呼ばれていた。



（草津市教育委員会文化財保護課資料 1）より
志津大將軍—追分岡田—矢倉口—坊主東と大溝遺構（道状遺跡）が並ぶ



（古代推定官道と遺跡の関係 2 草津市文化財保護課資料）より

◇ 東海道が鈴鹿を越えて近江に入り貫通したのは、平安京遷都794年、都が（京都）に移された以降と考えられる。（勢多—岡田—甲賀—鈴鹿）尾張、から東国へと通じた。

野路岡田遺跡発掘調査で上記ルートの岡田が今までは志津の岡田遺跡または甲賀の岡田とされていたが瀬田—野路間の東海道併用ルート説

と野路岡田が東山道と東海道の分枝点としての立地条件にあることから野路岡田が正しいのではなかったのか？

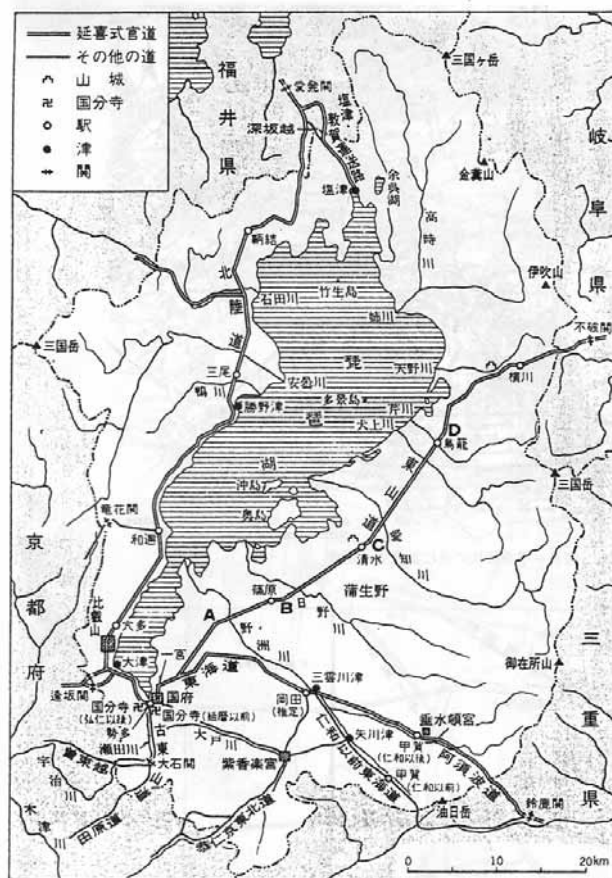


図 7-18 近江の古代主要交通路

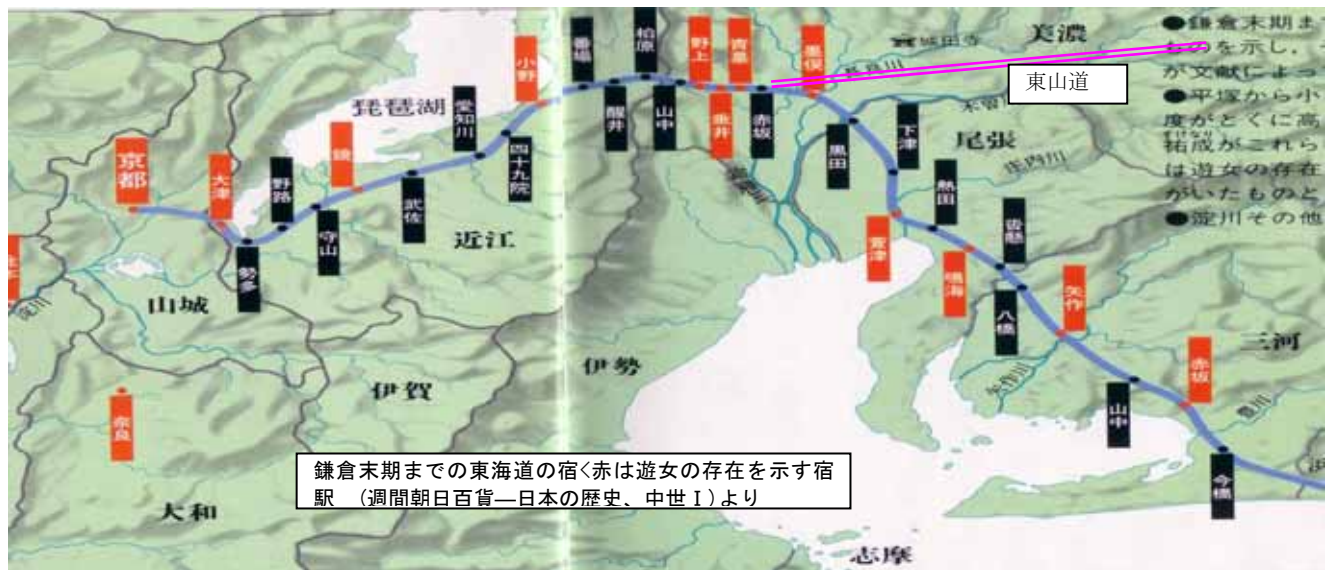
足利健亮『日本古代地理研究』より

「東山道」

奈良、平安、鎌倉末期まで近江の東山道に設けた宿驛は（大津—勢多—野路—守山—鏡—武佐—愛知川—四十九院—小野—番場—醒井—柏原—山中）から美濃の国へ、延喜式律令（927年）

- ◇ 奈良時代初期の近江の東山道に設けられた駅家、（勢多—篠原—清水—鳥竈—横河）の五駅（844年）頃文献には勢多駅（堂ノ上遺跡）、と野路宿—梨原驛（野路驛）とも言うが存在していた。

◇ 堂ノ上遺跡の発掘によって勢多駅の存在が確認され、昭和40年以降の瀬田大江「勢多遺跡」発掘によって近江国府跡が解明出来た。



(鎌倉末期までの東海道は美濃の垂井から東山道と合流し近江では混合ルートであった。) このルートに野路宿が記されている

3-2 中世の野路宿と東山道遺構発掘

◇ 平成13年度、野路岡田遺跡の発掘によって野路駅と東山道ルートが解明されようとしている。

(草津市文化財保護課資料より)



(野路岡田遺跡を東山道と古道馬道が交差)

(平成14年5月29日新聞各紙は野路岡田遺跡で東山道発掘のニュースを報じた)



東山道の^{しんすいてい}新推定ルートは勢多の近江国府から大江一大萱一南笠一野路榊差一澤一野路岡田遺跡一矢倉遺跡一草津門ケ町一大宝一守山一の遺跡地帯を貫通して居たものと考え。

◇今回確認された道路遺構は、官道とされている幅員規模に合致するもので、道幅 9~12m で側溝と道の両脇の干渉地帯（グリーンベルト）部分を含むと全幅 20m の範囲となった。

道路跡の底面に残された波板状凹凸遺構の埋土内に、11 世紀以前の遺物しかなく、側溝と路面埋め土からは 13 世紀後半の遺物しか認められないことから、9 世紀~13 世紀の 500 年間補修工事をしながら使われてきた官道（東山道）であったことに違いはない。



(道路面に材木を埋めて泥濘の防止をした跡)



(東山道の道端に旅人が使える井戸が掘られた)

また、本道路遺構の東西両側の道沿いには平安から鎌倉時代の掘立柱建物跡が建ち並ぶことから野路宿と野路集落が東山道と共に栄え共に衰退して行ったと考える。



(東山道沿い東、野路側に無数の掘立柱建物跡)



(東山道沿い西、川の下側に官舎風大型建物跡)

- ◇ 鎌倉末期までの巨大官道（東山道）は、時の^{せいけんあらそ}政権争いの時代に入り、^{ちやうていせいけん}朝廷政権と^{ぼくふ}幕府と^{じしや}寺社を巻き込む土地の^{りやうゆうけんあらそ}領有権争いとなり、使う事のない巨大官道は維持、管理が出来なくなり必要な道幅（3m）位を道に残し^{さんち}残地は、その土地の領主が農地として、農民に与え開拓された時代が室町時代中期まで続いたと考えられる。
- ◇ 東山道は自然に^{せば}狭まり、後の^{なかせんどう}中仙道になり、近くを東海道や代わりの間道が在るところでは、野路一瀬田間のように消滅した区域が出てきたと考えられる。

3-3 江戸時代の東海道と中山道(東山道)



室町時代に入ると「一遍上人いつべんしょうにんえん絵傳」や「関東紀行かんとうきこう」の「東路の野路の朝露けふやは 袂にかかるはじめ成るらん」や「行く人のとまらぬ里と成りしより、

荒れのみまさる野路の篠原」と詠まれた様に東山道の重要な野路宿も次第にさびれ始め、それに変わって「草津」の地名が現われてきた。

室町時代むろまちじだい応永 31 年(1425)将軍足利義持は伊勢神宮参拝に際し途中、休泊所を草津に設け仮御所として宿した記録がある。

寛正 6 年(1465 年)に足利将軍義政の宿泊施設
「草津御所」が造営され、その後(1594 年)には草
津の田中九藏家が傳馬役務に携わっていたとある。

江戸時代、^{けいちよう}慶長6年(1601年)東海道を整備され、
一年後の慶長7年に中山道が^{せいび}整備され草津宿で東
海道と合流した。

それまでの幕府の五街道を管轄する道中奉行からの書簡などの宛名は、東海道では江戸品川より大津宿まで、中山道は板橋より守山宿(守山市)となっていた。



古代から中世の近江の地図では野路宿を基点に東山道と東海道が分かれていた。馬道を間道として見るか、東海道として見るかは今後とも学説が有ると思う。地元、野路や志津では古老たちの伝承で明治末期まで、この道を(おかさん道)と呼び岡田から三雲間のことと言われているが、野路岡田か志津岡田かは未だ明確でない。この他にも時代によって間道として追分―矢倉―野路宿のルートがあった。

3-4 野路宿を治めていた環濠屋敷と領主館

平成 14 年度の発掘で東山道(南北)道状遺構に引き続き今度は東西方向に幅 3m 深さ 1.5m 長さ 150m の環濠が発掘された。



「敷地の北側環濠 川の下側より撮影」

その後平成 15 年度に同敷地の続き西側の発掘調査が行われ西側にも同じ環濠が北側の濠と接続されている事が発見された。



「敷地西側の環濠」

「敷地北西の環濠接続コーナー部分」

続いて西側環濠の南端のコーナー部分と南側に続く一部 15m 位の試掘作業が行われた結果、この濠は敷地の南北と西の三方を取巻く環濠屋敷で東側は東山道に面した構えに成っている。



「敷地北側に続く試掘」

3-4 環濠屋敷から官衙風大型建物は領主館

H14 年度発掘現場中央の東山道(道状遺構)沿いの西側に官衙風大型建物跡が発掘された。敷地 130m×150m 建物の柱跡の大きさや柱数及び面積が一般の掘立柱跡(二間×四間)位に対して、その三倍はある立派な柱跡で、これは野路宿の支配者か、時の政庁役人かがこの館に住んでいたのではと考られる。



「古代官道(東山道)に面した官衙風大型建物の柱跡」

野路の新宮神社の社記に野路宿禰の藤原為亮氏が新宮神社の社殿を昌泰3年4月建立し従五位を授与したと記されており、平安時代に野路宿の有力者として、ここに館を構えていたのではと想像する事で社記に記されている人物との関連性が出てくるのではないと思われる。

「中世の野路は詩や文献と岡田遺跡発掘調査から描いた想像絵図 イラスト 岡田俊二」

3-5 領主か官衙敷地内の立派な井戸

館や敷地の規模だけではなく井戸についても、それらしき井戸が発掘された



「大型建物と同じ敷地に在った大型の井戸」



「発掘で井戸底部分に埋め込まれた井戸枠、」

この時代は庶民は共同井戸が殆どであったが、これ等の中で、官衙屋敷内で発掘された井戸は一段と立派な井戸枠が現われた。

榎^{けやき}か灌木の大木を チョンナで削った厚板「厚み 5 c m 長さ 120 c m 幅 50 c m」の木組み造りであった。

井戸は岡田遺跡全体で 40 個以上を発掘し調査確認を行い井戸内形状や埋土から出た遺物で時代の調査判定も行われた。

町屋が使ってたと思われる共同井戸や農家が家畜や農作物にやる野井戸も、旅人と車馬が使う東山道沿いの共同井戸等、多数の発掘で確認調査が行われ井戸の規模や質は普通、井戸枠には竹組みか杭で薄板を止める位で、それすら無い井戸が殆どであった。



中世東山道と馬道の野路宿や野路の集落イラスト



野路岡田遺跡から発掘された環濠政所屋敷想像絵図

野路岡田遺跡(埋蔵品の発掘風景) 1 部紹介

の 小 皿 が
現 わ れ た」



「掘立柱ピットから瓦器碗」



「土墳墓に埋設された小刀と小皿」



「古墳周濠から合子の破片」



「古墳周濠から須恵器合子杯身」



「遺構埋土から出た羽釜片土師器」



「生活の遺構で発掘(はそう)瓶」



「遺構断割り土器茶碗埋設写真」



「古墳濠に埋められた陶馬の尻」



「溝の埋土に混じった古代瓦片」



「掘立柱ピットに埋もれた土師器小皿」



「生活の区画溝に耳小皿と土師器」

平成 12 年度から 15 年度の野
路岡田遺跡、発掘調査現場より
1 部埋蔵品発掘風景を紹介

草津市教育委員会
文化財保護課
発掘調査作業より

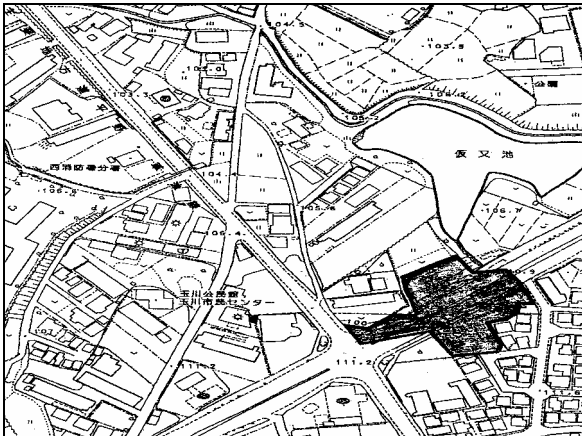
4ー1、史跡—野路小野山製鐵遺跡

以下の内容は草津市教育委員会文化財保護課発掘調査の写真と資料に基づいてこの内容を記載いたしました。

野路小野山製鐵遺跡は、京滋バイパス建設に伴い、昭和54年～58年に発掘調査が行われました。

その結果、製鉄炉11基、木炭窯6基、大鍛冶跡1基、塀をめぐらせた収蔵施設1棟、工房跡7棟など、奈良時代(650～760年)にかけて製鉄に関する一連の遺構が発見されました。

(草津市文化財保護課現地説明会資料より)



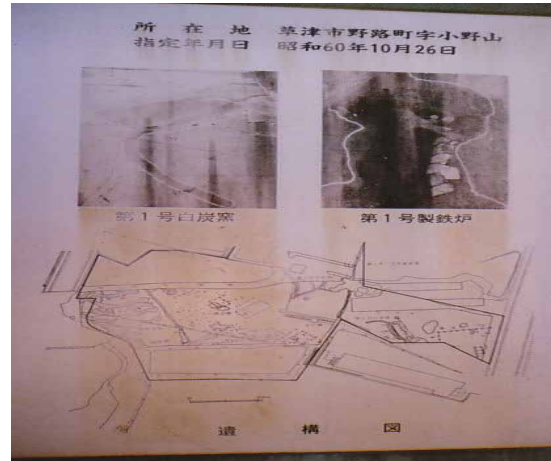
奈良時代、国家政庁の関与の色濃い官営工場的性格を持っていたと考えられる。

古代製鉄専門遺跡としては全国唯一の国史跡に指定され野路の古代を偲ぶ一つとなった。

遺跡は京滋バイパスの野路中央高架下地中に保存されている。



(現地に当時の国指定史跡、表示板)



(製鉄炉遺構の写真と図面、遺跡保存)
(草津市文化財保護課発掘調査資料より)

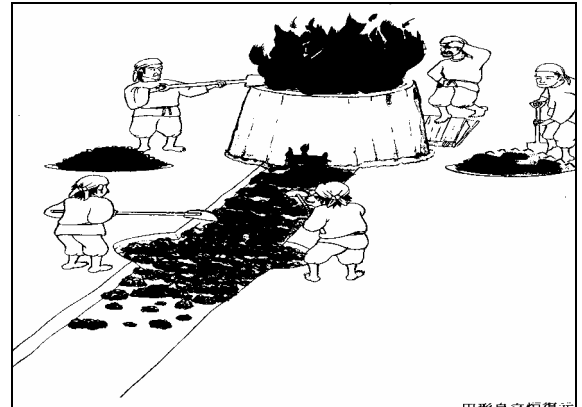


(発掘調査で発見された二号製鉄炉の地面)

二号炉の周辺には製鉄炉6基が整然と並び、それらを取り囲む(鉄さい)溶けた鉄屑の流れる(湯道)溝があり、発掘当時にこの周辺から(鉄さい)が大量に埋まっていた。

また、原料の鉄鉱石が同時に掘り出された。

(草津市文化財保護課発掘調査説明会資料より)



(当時は円形自立炉と想定されていた復元図)



平成12年に史跡整備計画のため京滋バイパス高架下の二号製鉄炉を重点に再調査が実施された。

この結果、古墳時代以来の伝統的な長方形箱型炉であるとされた。



(製鉄炉の床面に石敷き)

今回の再調査でした結果

(草津市文化財保護課現地説明会資料より)



(二号炉再調査の図面と復元図)

以上の野路小野山製鉄遺跡は野路木瓜原製陶、製鉄遺跡とあわせて、古代奈良の政権にとって重要な鉄製品の供給基地であったと考えられる。

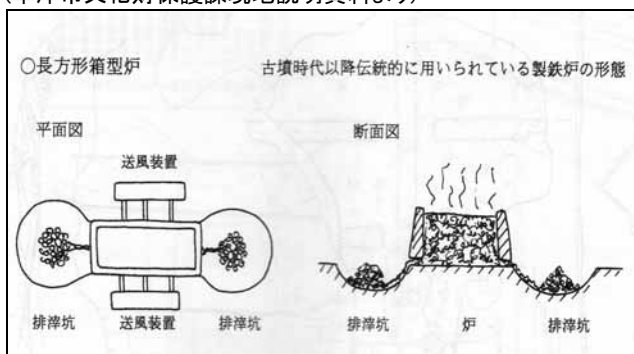
立地条件もノジヤマ丘陵に燃料に使う炭焼きに適した灌木(樫、ブナ、椎)等の硬い木々が一面に茂っていたと想像できる。

また、東山道が近く野路岡田を通り勢多には近江国府があり製品の運搬にも便利であったと思う。

これ等の、仕事に携わっていた職人達は、野路の何処かに家を建て集落をつくって生活し、仕事場に通っていたのではと考えられる。

これ等の人々を祖先とする子孫が、現在の野路町住民の中に何人かは居られても不思議ではない。

(草津市文化財保護課現地説明資料より)



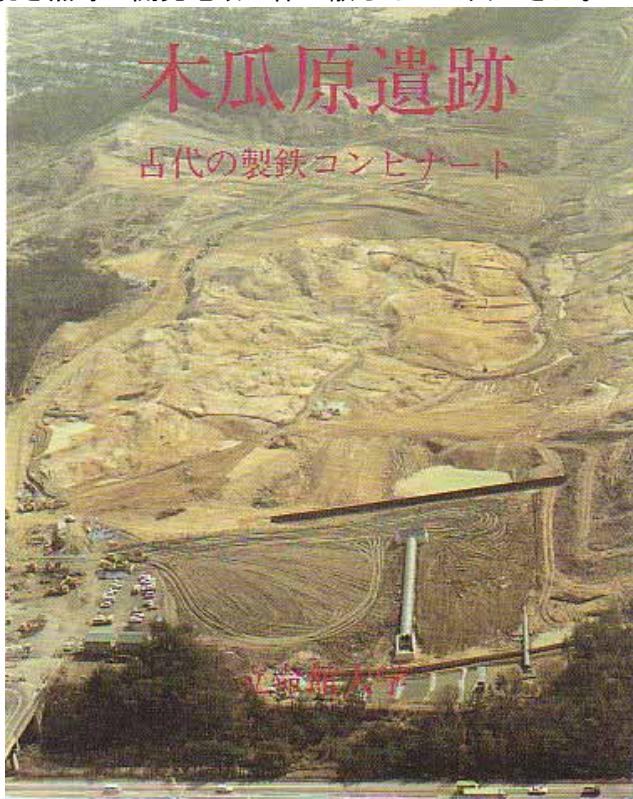
(長方形箱型炉、平面図、立体断面図)

5-1 野路木瓜原製陶、製鉄遺跡

(以下の内容は立命館びわこキャンパス保存の木瓜原遺跡現地見学会の資料パンフレットに基づいて作製したものです。)

平成2年に現在の立命館大学びわこキャンパス平成6年開校が野路山に誘致されるに当たり、京滋バイパスより東の山手側一帯の広大な野路山を造成されていた時のこと。

開発工事に先立ち13万㎡にも及ぶ発掘調査で、山の表土を削り取ると次々と製陶炉跡、製鉄炉跡、炭焼き窯等が開発地域全体に散らばって出てきた。

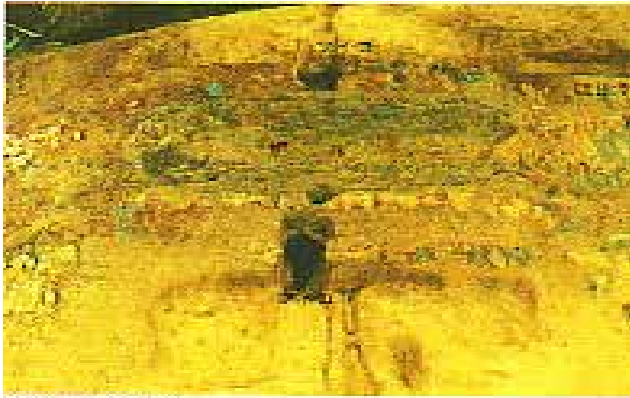


(木瓜原遺跡発掘当時—写真の下に名神高速)

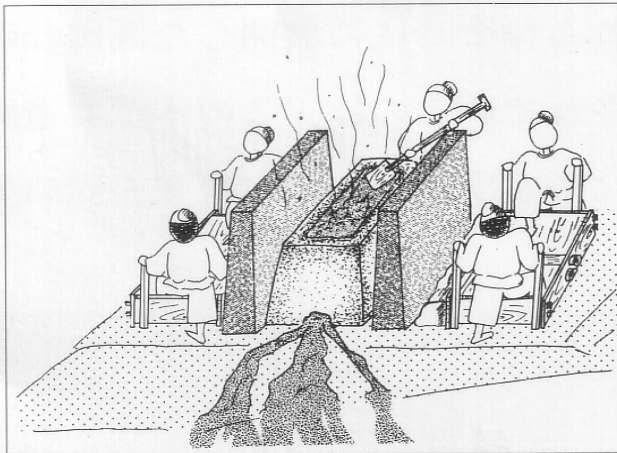
木瓜原遺跡は670年頃から750年頃に製鉄・製陶(須恵器・土師器)から梵鐘の铸造までおこなっていた、さながら古代のコンビナートとも言うべき総合生産遺跡である。

遺跡は琵琶湖との高低さ50mのなだらかな丘陵地帯のなかに位置し、4キロほど南西には近江国庁が営まれていた。瀬田丘陵一帯はこの近江国庁の設置とともに開発が進められ、木瓜原遺跡もその一環として律令国家建設に大きく関与していたものと考えられる。





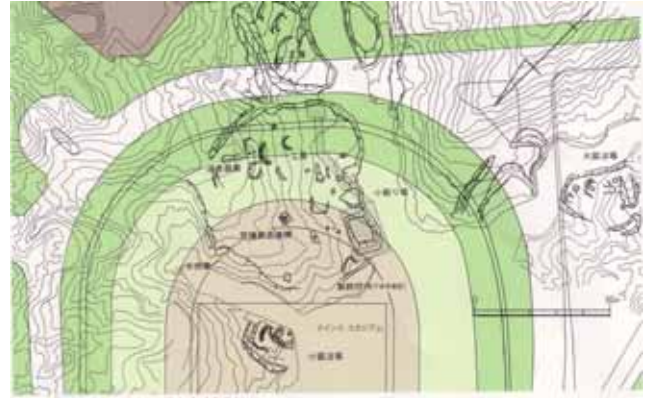
小口側遺跡



⑤ 木炭・鉄鉱石を投入し、空気を送り込み、数日間燃しつづける。小口側の穴からは、湯が流れ出てくる。



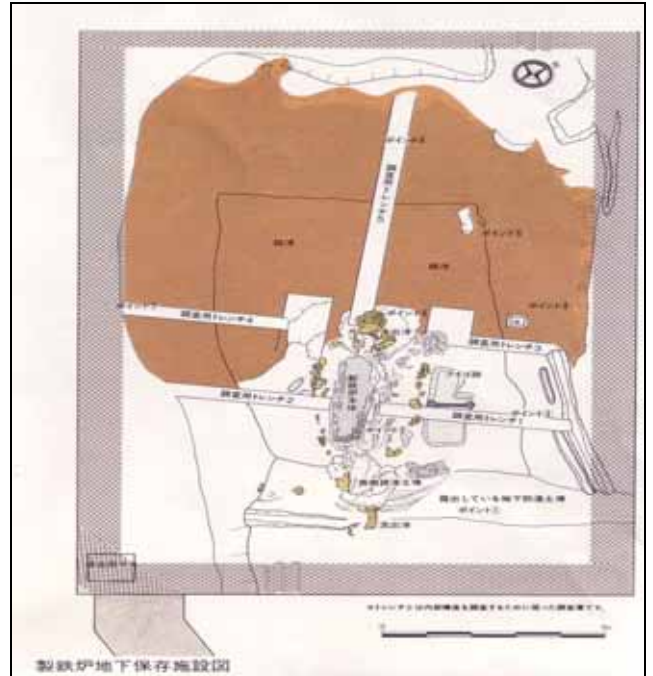
釜鑄製造跡



遺跡中心部と地下保存遺跡



製鉄炉地下保存施設(現場写真)



製鉄炉地下保存施設図

(木瓜原遺跡—立命館大学パンフレット)より



野路集落の中世(平安～鎌倉時代)を歴史文献と詩や伝承に基づき、最近の野路西部開発事業による岡田遺跡の発掘調査で野路宿や東山道と(馬道)古道が明確になり、この時代の野路をイメージしたものをイラストで表わして見た。

イラスト 絵 野路町 岡田俊二

6、野路集落の移り変わり

社寺の歴史 (栗田郡志記他参考資料より)

6-1 新宮神社の由来

新宮神社の社紀によると奈良時代の高僧(行基)によって野路寺が創立の時、鎮護神として天平2年(730)祭神に速玉男命と事解男命が祭られ、御神体に(那智の黒石)が祀られていることから熊野新宮大社の分社に由来したものと考えられ、宝亀元年(770)おり野路里の鎮守さまとして野路宿の宿禰、藤原為亮が社殿を創建されたと伝えられている。



現存する本殿は大永3年(1523)建立の優美な椀皮葺建物で重要文化財に指定されており、又、歴史的に価値のあるものとして入口の脇門には旧膳所

城水門が移築されています。



6-2 八幡神社跡記述より(栗太郡志)

本社敷地は東西15間南北4間面積124坪本村字萩の里元標より西にあったと郡志に記されている。



八幡神社跡の縁記書には、当社は応神天皇を祭神とし、寛平元年(889)に八幡社が創建されたとあり、

明治末からの神社合併政策によって、大正 5 年 (1916) に当地をはなれ、新宮神社境内に合祀されたため、史料が残されていないので、其の旧姿や経緯を知ることは出来ない。

中世当時の八幡さんは野路の里村の中央に位置し旧東海道に面し平安時代から野路里の人々は勿論、街道を行き交う旅人や武家衆にも篤い信仰を得ていたと思われます。



(上は新宮神社境内に合祀された八幡さん)

6-3 野路寺の伝承と玉川山 常德寺

新宮神社の社紀から奈良時代の高僧(行基)729 ~749 年によって野路寺が創建されたとあり、その後も新宮寺として、また、野路の里には室町時代に浄泉寺と願林寺が開基されたが、それまでの 700 年の長い間は野路寺が唯一 野路村落の人々の仏教信仰の拠り所として存在してきたのではないかと思われる。

その根拠は次の 4 つが考えられる。

- (1) 野路町史の監修者の見解によると、天正 2 年 (1574) 常德院主明西が新宮神社の社紀を記しており、常德寺につながる常德院なるものがあつたこと、又、代々常德寺の世話方は氏子総代が兼ねて来た、記述あり。(野路のくらしと歩み) より
- (2) 現在の曹洞宗、常德寺 面積 560 坪は新宮神社山門前に位置し、野路寺のあつた場所と思われる所で、寺記によれば、鎌倉時代妙心寺末の禪刹として興隆し、のち度々の戦火のため衰退したが、江戸時代の、明和 5 年 (1768) に僧明庵和尚を迎えて古刹を再興すると記されている。



(3) 野路の在所の古い家々では、宗派とは関係なく昔から野路のお寺として支えて来られたし、法会ごとに参加し、お詣りする慣習が根付いている。

(4) 観音堂池から出てこられた観音様

江戸明和時代に現在の玉川小学校になっている、野路の観音堂池から観音立像が黒く焼け焦げた状態で出てこられた。

昔火災にあわれて、池に沈められたと伝えられている。

明治初期の野路の世話役が寄進を募って常德寺境内に観音堂を建立して安置された。



(明治初期の観音堂の内壁に寄進札が 40 数軒掲示された写真、当時の野路里の寄進者名が半数ほど確認できた。)

この古い観音堂は当時としては瓦葺の立派な建物で平成 13 年に解体されるまで現存していた。

今は下の写真のように修復された観音さんにふさわしく綺麗なお堂になった。



(観音堂再建落慶法要 平成 13 年 10 月 14 日)



現在の観音さんは平成に至って仏師によって見事に修復されたもので、また、お堂も 21 世紀を記念して多くの方々の寄進で新築されたものである。

「常德寺観世音縁記」

- ・平安時代作 寄木造り
- ・聖観世音菩薩(立像)

身体 1 メートル余り、聖とは「神聖なる」という意味です。

6- 4 玉川山 浄泉寺

玉泉山と号す寺、鎌倉新仏教の祖師親鸞を拝し、面積 366 坪、真宗大谷派本村元標より東にあり、布教進展の世紀、室町時代の乱世において蓮如上人、本願寺第八代法主に就任の 3 年後に、創建された寺で、寛正元年 (1460) 僧圓実開基



とあり、野路寺を除く 4 ヶ寺の中では最初に開基さ

れたお寺である。

門徒衆は中世東山道(:現在発掘調査中の岡田遺跡から発見された官道と野路宿跡)が室町中期につぶされて、現在の野路街道(旧東海道)が開通された頃の馬道沿い、川の下から字岡田を経て狭間池を越えて新宮神社から志津追分へ抜ける古道沿い周辺の家々が檀家になったと考えられる。

何故なら檀家の田地の所在がこの辺りが多く見られる事からも判断できる。

檀家の中でも東山道より西にあった家は「川の下」集落に住居を移したと考えられる。

6-5 白萩山 願林寺

白萩山と号す寺域、面積 240 坪本村中央字萩の里元標近くにあり開祖親鸞聖人の教えを説く寺院、真宗大谷派で永正 9 年(1512)に僧清弥によって開基された。この時代は真宗にとっても大変な時期で蓮如上人の御文章という解りやすい文章で農民を教化し、晩年大阪石山本願寺を建てて、真宗を一大教団に発展させた頃のお寺です。



当寺の檀家は何処から来たのかを以前、住職の老僧に聞いた事がある、願林寺門徒の先祖さん達は平家の落人で野路に住みつき、東山道沿の榊差、広野は勿論、野路宿の有った岡田遺跡の辺りと、小野山の南笠までの荒野を開拓してきた人達と言われた。但し平家の落人については定かでない。

岡田遺跡を発掘して古代から中世の建物柱跡は何千と無数に出てくる、鎌倉、室町前期の建物跡は 50 軒を超える多さ、古道「馬道」と東山道が交差している辺りが野路宿で当時の野路の中心と思われる。

東山道が室町中期に農地として潰されると字岡田地区にあった集落は、野路街道「旧東海道」沿

いの字萩の里を中心に南へ家を建て移って来たと考えられる。

檀家と共に室町時代の荘園制度による農民への年貢の取り立てや、戦国時代の戦いによって東海道筋の門徒の家々では剥奪や放火に苦しみ、永い乱世を仏の救いを拠り所としてきた願林寺も、間もなく開基500年祭を迎える。

6-6 本清山 教善寺

本清山と号す寺域 面積240坪 開祖法然上人の教えを拝する浄土宗鎮西派 本村元標より北にあり、江戸前期承応2年(1653)に遠藤権兵衛なるもの渡して僧となり名を隋誉と改めこの寺を創立す、即ち之を開基なすとある。



平成10年に開基350祭が盛大に行われた比較的历史の新しい寺院で、檀家は江戸時代まで馬道沿いと北川の周辺に先祖さんの開拓をし守ってきた田地と家敷のある家が多く、現在の東海道が草津から矢倉を経て野路本郷を貫通したのは室町末期から安土、桃山時代以降のことです、この頃に野路北部を中心に家を構えたものと考えます。

それまでは野路北部に東海道の街道はなく、東海道は勢田神領から野路本郷の馬場を基点に新宮神社を経て志津の追分へ、そして甲賀へと続いていた。

6-7 南田山 高岸寺



野路町南田山に高岸寺と号す寺域、面積250坪にて浄土宗鎮西派で野路本郷から西の十禅寺川の下流

域に位置し、江戸後期、宝暦8年(1758)僧憲誉が開基された。野路では一番歴史の新しい寺である。

6-8 川の下猿田彦神社

野路町(新町)川ノ下集落の北川と矢橋街道沿いに位置し江戸時代の初期、寛永2年(1625)に猿田彦命を祭る神社、村の出来た時期や、街道の通った時期に建立された神社で集落の護り神として、また旅人の安全を祈願する神として、祭事は新宮神社と同じで新宮神社の宮司によって執り行われている。



古代から中世の川の下集落は野路岡田遺跡を中心に一つの集落であった。それが東山道より西北側、野路宿と続く馬道沿いにあった集落は東山道が田圃として開拓され、なくなると室町から江戸時代に矢橋街道周辺に移住して行くと遺跡発掘の住居跡から判断できる。また、寺の檀家構成に川の下集落の檀家が含まれている事からもわかる。

6-9 南田山稲荷神社



南田山稲荷神社は江戸時代宝暦3年(1753年)野路柳差の霊地に御神殿を造営し御祭神に宇加計御魂命を奉ったのが、この神社で、別名「豊受姫命」とも申しあげ、食物の御魂の神であり、五穀豊穰・家内安全など功德ある神で稲荷神社の主神とされている。

南田山地域の先祖は江戸時代膳所藩の農地開拓政策により十禅寺川周辺と柳差古墳群を開拓し、この地に集落が出来たものと考えられる。